

明代「海篇類」字書群に関する二、三の問題 —附：現存海篇類目録—

大岩本 幸次

0. はじめに

明の万暦年間を中心に、書名や体裁の極めて類似した一群の字書が続々と刊行されている。これらは多く書名に「海篇」という部分を含むことから、しばしば「海篇類」と総称され、いくつかの概括的研究も存在する(1)。今回、この海篇類字書群についてその性格の全体的傾向を把握することを目的とし、内閣文庫等に所蔵される同類の字書を対象に初歩的な考察を試みた。なお概括的検討の域を出るものではないが、海篇類と韓道昭『五音篇海』(1208年)との関係や、海篇類の音韻史研究上の有用性といった問題について、従来といささか異なる見解を得たので、海篇類の目録とあわせてここに提示したいと思う。

1. 目録

日本国内で目にできる海篇類として、『四庫全書存目叢書』(荘嚴文化事業有限公司、1997)に収録されるものを含め、現時点で29種を確認している。その内、目睹し得た26種については、字書部分の類似を特に重視して海篇類と判断した(2)。加えて、『中国古籍善本書目』(經部、上海古籍出版社、1986)に基づき、中国に現存するものとして5種を採録した。この5種を含めて備考欄に「未見」とあるものは、書名から海篇類と推測するものである。その他『増續大廣益會玉篇大全』(毛利貞齋撰、1691年)にはさらに、「玉鏡篇海」「海篇玉鉉」「海篇玉衡」「海篇掌珠」「海篇正韻」といった海篇類らしき書名が見え、この字書群の全容についてはなお考察の余地を残している。目録の「刊行者及び刊行年」の項目における刊行者の姓名等について、謝水順・李珽『福建古代刻書』(福建人民出版社、1997)を参考にした箇所がある。また、「所在」の項目において【 】に示した数字は、『中国古籍善本書目』における資料番号であり、その所在地の表記については原則として「図書館」を省いた。例えば「北京」とある場合は「北京図書館」を指す。

No.	卷一 卷首 標題 (大字は略称)	編纂等 関係者	刊行者及び 刊行年	所在(ゴシック太字は目録し得た版の所蔵先)	備考
[1]	新 校 經 史 海 篇 直 音			内閣文庫 (5巻5冊)／ 尊經閣文庫 (重校經史海篇直音・10巻10冊)／東洋文化研究所(5巻)／【4626】:10巻 嘉靖23年勉勤堂刻本(清華大学・復旦大学)【4627】:10巻 隆慶3年吳氏刻本(陝西省)【4628】:『重刻經史海篇直音』10巻 明刻本(首都・清華大学・北京師範大学・上海・復旦大学・上海博物館・浙江)【4629】:5巻 萬曆3年司禮監刻本(北京大學・北京師範大学・故宮博物院・北京市文物局・陝西師範大学・天一閣文物保管所)【4630】:5巻 萬曆6年黃祿刻本(杭州市)【4631】:5巻 明刻藍印本(北京・陝西省)【4632】:5巻 明刻本(北京大學・中国科学院・蘇州大学・浙江・安徽師範大学・河南省・鄭州大学・中山大學・重慶市)【4634】:5巻 明刻本(南開大学)【4635】:5巻 明刻本(浙江)	1段組／直音 ／字母分部
[2]	翰 林 筆 削 字 義 韻 律 鰲 頭 海 篇 心 鏡	蕭良有・ 余應奎	吳氏三友堂 ／萬曆10・ 1582序	国会図書館 (20巻5冊)／蓬左文庫(6冊・萬曆22・1592年唐氏世德堂刊本・有御本印記・駿河御讓本)／尊經閣文庫／【4644】:蕭良有 萬曆11年書林吳氏三友堂刻本(北京大學・大荔県朝邑文化館・青海省)	2段組／直音 ／門類分部
[3]	重 校 全 補 海 篇 直 音		鄭世豪(字 雲竹・宗文 書舍)／萬 曆23・1595	国会図書館 (12巻・合6冊・首3巻)／【4636】:12巻首3巻 蔡煥輯 新集背篇列部之字1巻 萬曆23年書林鄭世豪刻本(北京大學・復旦大学・甘肅省・南京師範大学・浙江・武漢大学・華南師範大学)	1段組／直音 ／字母分部
[4]	翰 林 重 攷 字 義 韻 律 大 板 海 篇 心 鏡	劉孔當・ 彭應起	葉會廷／萬 曆24・1596 刊	内閣文庫 (20巻8冊)／ 国会図書館 (7冊・書林潤泉葉如琳刊／また10冊・書林葉天熹刊)／東大総合(12冊・蕭良有撰・劉孔當校・彭應起校録・萬曆24・1596年・建陽書林葉天熹刊本)／早稲田大学(首1巻・10冊・萬曆24年12月葉會廷・唐大)／尊經閣文庫(零本1冊・蕭良有撰・萬曆版)／【4660】:劉孔當撰 萬曆24年書林葉會廷刻本(北京・首都・北京大學・祁県・南京・湖南省)【4661】:劉孔當撰 萬曆26年書林葉會廷刻本(北京師範大学)	刊記「萬曆丙申歲太呂月葉會廷梓」／ 2段組／直音 ／門類分部
[5]	重校古本五音類聚 四聲切韻直音 海篇大全	韓孝彦	余彰德・萃 慶堂／萬曆 30・1602序 刊	内閣文庫 (14巻・巻5～10缺・7冊)／ 蓬左文庫 (14巻・首1巻・8冊)／【4646】:建邑書林萃慶堂余彰德刻本(南京大學)	2段組／反切 と直音／字母 分部
[6]	鼎 刻 臺 閣 攷 正 遵 古 韻 律 海 篇 大 成	曾六德	劉大易(龍 田)・喬山堂 ／萬曆32・ 1604刊	内閣文庫 (20巻11冊)／【4672】:曾六德撰 萬曆32年書林喬山堂劉龍田刻本(所蔵状況不明)	刊記「皇明萬曆甲辰冬月吉旦書林喬山堂劉龍田續梓」／ 2段組／直音 ／門類分部
[7]	重 詳 校 篇 海 刊	李登	刊行者不明 ／萬曆36・ 1608 序 刊 (清印)	内閣文庫 (5巻10冊)／早稲田大学(趙年伯撰・李登訂・唐大)／東大総合(趙欽湯增訂・萬曆中刊本・有闕葉)／国会図書館(趙年伯撰)／【4624】:5巻 李登 萬曆36年自刻本(北京大學・中国人民大学・吉林大學・陝西師範大学・安徽大學・福建省・湖北省・湖南省社会科学院)	1段組／反切 と直音／字母 分部
[8]	鏡 五 車 字 義 六 合 備 攷 四 明 海 編	吳亮	三槐堂(王 惺初?)／ 萬曆37・ 1609刊	内閣文庫 (13巻・首1巻・7冊)	「書林惺初校梓」／刊記「龍飛萬曆己酉春王正月／君王日三槐堂續梓」／ 2段組／直音 ／獨特の門 類分部

[9]	重刊 訂正篇海		崇禎7・1634 序刊(清印)	內閣文庫(10卷10冊)／東洋文化研究所(李登撰・張忻校・北海張氏刊本)／【4625】:10卷 李登 崇禎7年刻本(南開大學・黑龍江大學・天一閣文物保管所・湖南省)	1段組／反切 と直音／字母 分部
[10]	新刻黃石齋先生 集輯辯疑正韻 海篇犀炤	黃道周	鄭尚玄(字 幼白・人瑞 堂)／崇禎 17・1644序	國會圖書館(15卷・首1卷・5冊)	2段組／直音 ／門類分部
[11]	篇海類編	宋濂・屠 隆	南城 翁少 麓	內閣文庫(20卷・附1卷・10冊)／『四庫全書存目叢書』(卷188:20卷・附1卷)／尊經閣文庫(明版・寬文版)／蓬左文庫(屠隆 陳繼儒同序・錢塘虞淳熙刊本・有尾陽內庫印記 寬永10年買本)／【4586】:20卷 明刻本(山西師範大學・華南農學院)【4587】:20卷附錄1卷 張嘉和輯 明刻本(北京大學・中國人民大學・北京師範大學・中央民族學院・中共北京市委員會・福建省・湖南師範大學・重慶市)	1段組／反切 と直音／門類 分部
[12]	新鐫閣老台山葉先 生訂釋龍頭切韻 海篇星鏡	葉向高・ 鄒啓元・ 朱鼎臣	楊春時(誠 齋)	內閣文庫(19卷10冊)	2段組／直音 ／門類分部
[13]	鼎鐫木天考正龍頭 海篇棲鵲	凌霄鳳		內閣文庫(15卷・首1卷・5冊)	2段組／直音 ／門類分部
[14]	翰林重攻 字義韻律大板 海篇	陳五昌	鄭世容(雲 林)	內閣文庫(17卷7冊)	2段組／直音 ／門類分部
[15]	新鐫陳太史纂訂 海篇彙編全書	陳仁錫		內閣文庫(19卷10冊)	2段組／直音 ／門類分部
[16]	陳明卿太史考古 詳訂遵韻 海篇朝宗	陳仁錫・ 譚元春		內閣文庫(12卷8冊)／早稻田大學(12卷・3冊(合冊)・奇字齋・唐大／また7冊本)／【5117】:陳仁錫撰 明刻本(中國科學院・上海・南開大學)	1段組／直音 ／門類分部
[17]	禮部詳注正韻 字海明珠	翁正春	王翔鳳(荊 岑)・光啓堂 (封面:振鄴 堂)	內閣文庫(15卷・首1卷・7冊)	1段組／直音 ／門類分部
[18]	遵古本正韻 石齋海篇	黃道周	劉翼甫藜光 堂・劉欽恩 (榮吾)・劉 鑿麟(禎甫)	內閣文庫(10冊)／蓬左文庫(40卷・10冊・黃道周・崇禎中潭水劉氏藜光堂刊本)	『新刻洪武元 韻勘正切字 海篇群玉』 『新鐫校正增 切大藏直音』 『篆林肆攷』 の三種から構 成／1段組／ 直音／門類 分部
[19]	鼎鐫洪武元韻勘正 補訂經書切字 海篇玉鑑	武緯子・ 王衡	熊成治(冲 宇)・種德堂 ／萬曆刊	內閣文庫(20卷10冊)／東大總合(萬曆元・1573年建陽書林熊冲宇種德堂刊本)	刊記「萬曆新 春歲藝林熊 冲宇編梓」 ／2段組／直音 ／門類分部
[20]	鐫玉堂釐正龍頭 字林備攷 韻海全書	李廷機		內閣文庫(16卷・首1卷・8冊)／蓬左文庫(6冊・李廷機撰・萬曆23・1595年書林劉朝瑄(双松)安正堂刊本)／尊經閣文庫(16卷・8冊)／【5100】:李廷機輯 萬曆23年書林安正堂劉雙松刻本(華東師範大學)【5101】:萬曆書林周曰校刻本(重慶市)	2段組／直音 ／門類分部

【21】	精刻海若湯先生校訂音釋五侯鯖字海	湯顯祖		內閣文庫(20卷10冊)／『四庫全書存目叢書』(卷192:20卷)／【4647】:蕭騰鴻刻本(山東大學)【4648】:明刻本(北京·北京大學·北京師範大學·上海·湖北省)	1段組／直音／字母分部
【22】	音韻字海	張溥·蕭鳴盛		內閣文庫(20卷·首1卷)	1段組／直音／字母分部
【23】	新刻瑞樟軒訂正字韻合璧	朱孔陽	金陵 張鍾福(少吾)·瑞雲館／崇禎	『四庫全書存目叢書』(卷199:20卷)／【4681】:20卷朱孔陽輯 崇禎瑞雲館張少吾刻本(河南省·湖南省)	2段組／直音／字母分部
【24】	新刻辨疑正韻同文玉海	黃道周	鄭以祺(體晉)	國會圖書館(20卷8冊)／【4679】:黃周道撰 鄭以祺刻本(北京大學)	2段組／直音／門類分部
【25】	新鐫玉堂補訂海篇正鵠	唐文獻	余祥我(應興)潘發堂／萬曆刊	國會圖書館(20卷·首1卷·10冊)	刊記「萬曆新春歲仲冬月／潘發堂余祥我繡梓」／2段組／直音／門類分部
【26】	三台館仰止子考古詳訂遵韻海篇正宗	余象斗·李廷機	余象斗·雙峰堂	尊經閣文庫(20卷8冊)／陽明文庫(萬曆26·1598年余文台刊本)／【5105】:余象斗撰 萬曆26年余氏書林雙峰堂刻本(北京師範大學)【5106】:余象斗撰 萬曆30年葉近山刻本(武威鼎博物館)	刊記「萬曆庚申歲秋／月余文台重梓」／2段組／直音／門類分部
【27】	刻太古遺踪海篇集韻大全	鄒德溥·夏以仁	陳孫安(号昆泉子·積善堂)／萬曆17·1589	早稻田大學(31卷6冊)／【4645】:鄒德溥輯 夏以仁補遺 潭城書林陳孫安刻本(南京師範大學)	《未見》
【28】	翰林釐正備攷字義韻律龜頭鏡海篇全鏡			東大綜合(15卷7冊(卷13~15缺)·新鐫翰林釐正平仄四書六經小學鑑史全鏡一卷)	《未見》
【29】	玉堂釐正字義韻律海篇心鏡	朱之蕃	朝鮮刊本	東洋文化研究所(20卷10冊)	《未見》
【30】	新刊月峰孫先生增補音切玉鑑海篇			【4643】:孫鑣撰 書林存仁堂陳含初刻本(北京大學)	《未見》
【31】	精鐫海若湯先生校訂音釋海篇統匯			【4649】:金陵奎壁堂鄭思鳴刻本(北京大學·河北大學·東北師範大學·南京大學)	《未見》
【32】	張侗初先生校正洪武正韻增補音切通用海篇心鏡			【4673】:明末刻本(北京大學)	《未見》
【33】	新鐫中書科刪訂字義辨疑正韻海篇			【5107】:李喬嶽訂義 劉日寧校閱 萬曆26年書林鄭雲齋刻本(華東師範大學)	《未見》
【34】	新刊增補古今名家韻學淵海大成			【5079】:李攀龍撰 明末黃家鼎刻本(山東)	《未見》

2. 「海篇類」のタイプ

目録の備考欄には、刊記等についての情報に加え、海篇類のページ構成・音注形式・分類方式の三点に着目した区別を示している。ここでそれらの区別について説明しておく。まずページ構成に関して「1 段組」と「2 段組」とを区別する。「1 段組」とは、字書部分のスペースとしてページ全面を使うタイプを指し、一方の「2 段組」とは、ページを上下二段に分け、下段に字書部分を配し、上段には「五經難字」や「韻律」（『洪武正韻』を元にした韻書部分）等の付属要素を配列するタイプを指す。これはあくまでその版式における配置方式による区別であり、「1 段組」が付属要素を持たないということではない。次に、音注形式に関して「直音のみ」と「反切と直音」とを区別する。「直音のみ」には、文字通り完全に直音のみを採用するタイプに加え、収録字全体から見ればごく僅かな割合ではあるが、直音と反切とを共存させる場合のあるタイプも含まれている。そして反切と直音とをほぼ全収録字にわたって共存させる種類に限り、「反切と直音」と記す(3)。最後、分類方式とは部首の分類の仕方に着目して設けた項目であり、「字母分部」と「門類分部」とに区別する。「字母分部」とは『五音篇海』に倣って部首を三十六字母の順に配列するものであり、「門類分部」とは「天文門」「地理門」「身体門」などというように、部首をその意味別に分類・配列したものである。以上述べた特徴については、後掲の図版もあわせて参照されたい。

3. 海篇類の継承的性格

本稿において海篇類を判断する第一の基準は、字書部分の内容的類似であった。そしてこの字書内容が韓道昭『五音篇海』と合致することは福田襄之助氏の明らかにされたところであり、言い換えれば目録に収録した海篇類は全て、『五音篇海』と内容的関連を有する一群の字書であるということになる。ただこのことは、海篇類が韓道昭の『五音篇海』を直接の母胎として編纂された字書であることを必ずしも意味しない。例えば、『篇海類編』（図 1）という字書は、宋濂の編纂ということになっているが、実のところは、万暦の成立と思われる『詳校篇海』（図 2）の内容をそのまま引継ぎ、ただその分類方式を字母分部から門類分部に変更した書である。また、『海篇棲鶴』（図 3）と『海篇犀炤』（図 4）という二書の字書部分における収録字の配列を見ると、これら二書のみ共通する独自の順序を採用しており、二書の間密接な関係があることを窺わせる。さらに、湯顕祖の手になるとされる『五侯鯖字海』（図 5）と、作者不詳の『音韻字海』（図 6）との関係のように、書名こ

そ異なれ、内容的には全く同じ書である場合もある。最後の例は些か極端であるが、『五音篇海』との関係よりは海篇類同士の関係の方をより顕著に窺える資料であることには違いない。先行する海篇類にわずかな変更を加えることで次々に海篇類が展開していくという、いわば海篇類の継承性についての指摘は、従来の研究においても特に目新しいものではないが、ただ、海篇類全体をつなぐ観点からの具体的言及は無かったのであり、以下にこの点について筆者の気付いたところを補足することとしたい。

目録の備考欄にも示されるように、全ての海篇類は音注として直音を必ず採用する。反切はさほど重視されない。反切を多く収録する海篇類においても、反切だけを備えた収録字というのはまず見出せず、海篇類にとって反切はあくまで直音に従属する要素であると言える。しかしこの特徴は『五音篇海』とはかなり異質のものである。『五音篇海』は『大廣益會玉篇』や『龍龕手鑑』といった先行字書の内容を音義もろとも収録した字書であるが、それら先行字書の多くが反切を採用していたため、『五音篇海』も必然的に反切が多数を占める字書とならざるを得なかった。海篇類が直音中心であるのに対して、『五音篇海』は反切中心の字書なのである。おそらく海篇類は『五音篇海』の反切を直音へ変換する作業を行なったのであろうが、ここで興味深いのは、全ての海篇類が共通の直音用字を採用する傾向にあることである。筆者は海篇類の字書部分についてサンプル調査をしたに過ぎないけれども、それでも直音の類似傾向は明らかに見て取れる。一致しない例も個別的には存在するものの、少なくとも直音用字体系の類似を否定し得る程の状況ではないように思われる。義訓ならばまだしも、音注の一致が偶然に起こったとは到底考えがたく、そこに海篇類同士の直接的継承関係があったであろうことは否めない。

また、海篇類の底本について、大多数の海篇類は成化本『五音篇海』(1471年)の収録字状況を反映している。万暦年間の中・後期を中心に流行した字書群であるにもかかわらず、正徳(1516年)・万暦本(1575～1589年)『五音篇海』を用いて編纂されたとと思われる海篇類はほとんど無い。唯一、万暦30(1602)年の序を持つ『海篇大全』(図7)のみが、正徳以降の『五音篇海』に基づいて製作されているようである(4)。いずれにしてもかなり偏った底本状況と言うほかないが、海篇類の編纂にあたって『五音篇海』版本の種別にまで注意が払われた形跡も特に窺われず、敢えて正徳以降の版本を避けたという能動的要因によるものとも考えにくい。結局、底本の一致も、最初の海篇類が成化本に基づいて製作され、その内容を後の海篇類が踏襲していったことの表れである可能性が高いと考える。『海篇大全』はその書名に「古本」と掲げるが、これも古い版本の『五音篇海』に拠ったという事を主張するものではなく、むしろ『五音篇海』に直接依拠したことを示すものと思われる。直接『五音篇海』に依拠するだけでそれがアピールポイントと見なし得るほど、その他多

く、海篇類が無批判に継承関係に陥っている現状が、『海篇大全』編纂当時すでにあったことを反映するものと考えられるのである。『海篇大全』はその体裁にも『五音篇海』に直接拠った事実が顕著に窺われる海篇類であり、2段組海篇類の主流とも言える門類分部ではなく字母分部の方を採用し、また直音のみならず反切も『五音篇海』に見えるものは極力採録する(5)。編纂関係者として韓道昭の父韓孝彦の名を記し、よほど『五音篇海』に忠実であろうとしたのかと疑われるが、穿った見方をすれば、『五音篇海』から直接に海篇類を編纂する場合、『海篇大全』のような体裁が最も手間を要しない。一方、門類分部の海篇類は、直接『五音篇海』に依拠するとして、字母分部の『五音篇海』の内容を門類分部に変更するという煩瑣な編纂行程が必要となってくる。すでに門類分部である海篇類が存在するならば、それを踏襲する方が、編纂上の効率は圧倒的に高いはずであろう。

以上に述べた直音及び底本の状況はほぼ海篇類全体を貫く特徴と言え、海篇類の継承的性格が個々の事例にのみ当てはまるものではないことを示している。独自に『五音篇海』に依拠して編纂された海篇類など、実はほとんど無いのではあるまいか。

4. 海篇類字書群における『海篇直音』の位置

海篇類の直音と『五音篇海』の反切との対応について少々注意深く見てみると、中古音系とは合わない対応の多いことに気が付く。例えば『海篇大全』には、「思廉切」に対して「音先」、「烏故切」に対して「音誤」、「之酉切」に対して「音肘」などという対応関係が見える。これらは恐らく海篇類の直音というものが、明代における或る方言に基づく『五音篇海』反切の直音化作業の結果であることを示している。船津富彦氏も海篇類の音韻史研究資料としての可能性を指摘したが、直音と僅かな割合で共存する反切だけに着目し、『五音篇海』反切と関連付けて論ぜられることはなかった(6)。しかし、たとえ直音だけの海篇類であっても、『五音篇海』反切と対応させることにより、明代の方言の一側面を窺う資料として十分に有用であり得る。

ただ、先述したように、海篇類の直音は基本的にすべての種類において共通する。であれば最初に『五音篇海』の反切を直音に変換した海篇類が何か存在するはずであり、海篇類の直音を音韻史研究資料として活用しようとするならば、その最初の海篇類がまずなによりも基本的資料とされるべきであろう。そして直音という観点から改めて海篇類を眺めなおしてみると、そこにはある特徴的な海篇類が存在している。『海篇直音』という書がそれである。中国におけるこの書の所蔵状況を見ると、他の海篇類と比べて版本の種類が多く、複雑な様相を呈しているが(7)、この書を一見するに、どこにそのような需要を得る要

素があるのか首をかしげたくなる。先述したように大多数の海篇類は、「奇字便覧」や「五經難字」といった付属要素を大量に備えて自らをアピールする。対してこの『海篇直音』は、『五音篇海』から受け継いだ「背篇列部之字」を巻一卷頭に冠する以外、構成上の工夫や付属要素らしきものが一切見られず、至って飾り気が無い。字書部分についても、『五音篇海』の義注を短く削り、反切を完全に直音化するという、どの海篇類でも行なわれている程度の変更しかなされておらず、まったく『海篇直音』と名付ける他ない。これでは『海篇直音』という字書は、全ての海篇類に先駆けて登場でもしなければ存在する意義が見出せない。実際、このことを裏付けるかのように、現存する海篇類の中で『海篇直音』はさかのぼり得る成書年代が群を抜いて古い。現存最古の『海篇直音』としては、嘉靖 23(1544)年刊行の十巻本が中国に所蔵されているようであるが、明・高儒の『百川書誌』(嘉靖 16・1537 年成立)に、既に「經史海篇直音五卷 皆(マ)篇列部字引一卷」と記載があり、現存のものより更に古い『海篇直音』の存在を確認することができる(『百川書志・古今書刻』、古典文学出版社、1956、卷之二、p 33)。福田氏は『海篇直音』という資料自体に気付いていないか、少なくとも海篇類としては認知していない。船津氏は船津 1964 所掲の目録に『海篇直音』を収載するが、本文において言及するところはない。「2 段組」や「門類分部」の海篇類の中にあつては、この『海篇直音』の外観はこれといった特徴も無く、地味には違いない。ただ、その特徴の無さこそが『海篇直音』の最大の特徴であると見なすことも、この場合有効であろう。筆者は『海篇直音』が『五音篇海』を最初に直音化した字書である可能性が高いと考える。そして海篇類を音韻史研究に役立てる際にも、『海篇直音』は最も基本的な資料として中心的位置を占める海篇類であると考えられる。

5. 小結

福田襄之助氏は海篇類の流行について、画引きの採用という点をその要因として重視されている。これは福田氏論文の主旨の一つが、梅膺祚『字彙』が中国字書史上初の画引き字書であるとする従来の見解への反論にあつたということも関係するであろう。そして字書が民間に流布するにあたり、画引きによる収録字配列方法が確かな役割を担っていたであろうこと、筆者も福田氏の意見に同感するところであり、『五音篇海』が海篇類の底本として選択されたのはなるほど必然的であつた。ただ、『海篇直音』が最初に『五音篇海』の反切を直音化した、つまりは海篇類出現の先駆けとなつた字書であるという本稿における推測が正しいとするならば、画引きに加えて反切の直音化も、海篇類字書群が民間における需要を獲得する過程において、欠くことのできない重要な要素であつたこともまた事実

であろう。そして従来、海篇類を生み出した『五音篇海』の影響というものが指摘されてきたのであるが、むしろ『五音篇海』を直音化した『海篇直音』の存在が、海篇類が展開していく直接的契機として決定的な役割を果たしたのではないだろうか。本稿では海篇類について、関連する問題のごく一端を扱うに止まった。詳細な検討は今後の課題としたい。

注

- (1) 福田襄之助、1960、「字彙以前における画引き検索法の流行」（岡山大学『法文学術紀要』第13号）。のち、同氏の『中国字書史の研究』（明治書院1979）に「海篇類の研究」（pp393～409）として再録。また、船津富彦、1964、「明代の俗字書—明版海篇類管見—」（『中国語学』144号）。のち、同氏の『明清文学論』（汲古選書1993）に「明代における俗字の意識—明版海篇類管見—」として再録。
- (2) 海篇類を判断するにあたり、書名や、「五經難字」といった付属要素もある程度の参考になるが、全体を統一し得る特徴ではないため、絶対の選択基準に据えることは方法としてあまり有効ではないと考える。船津氏は、福田氏が海篇類として内容的類似を指摘した『韻海全書』を、「海篇」ではないという理由から船津氏論文所掲の目録に収録しないが、これは少なくとも、内容的に類似したある一群の字書の全体的傾向を探ろうとする本稿の取る立場ではない。
- (3) ページ構成と音注形式の2点に関して、余象斗の『海篇正宗』は少々例外的であるので、ここで説明を加えておきたい。まずページ構成について、『海篇正宗』においては上段と下段の間に僅かに2字分の隙間が設けられ、余象斗自身の手になるものであろうか、解説らしきものが加えられている。例えば、下段に「字有五音」の項がある箇所の中段には「字有五音歌云、大抵宮商角徵羽、應須紐美最為精、世間义理皆由此、自是人心不鮮明」と見える。また、音注形式について『海篇正宗』の字書部分は基本的に直音のみを採用するが、同箇所の中段には、いかなる基準に拠るかは不明ながら、各行に見える字のうちの或る一字が選ばれ、『五音篇海』の反切が付記されている。「諸字切法」という要素であるという。スペースの関係もあり一行につき反切は一つ、また毎行必ず付せられるというわけでもないため、反切の絶対数はそれほど多くはないが、反切を重視しているという意味では「反切と直音」の海篇類に準ずる。このように『海篇正宗』は「3段組」「反切と直音」とも見なし得る側面を持つのであるが、他にこれに類する海篇類が無いこともあり、目録の備考欄においては「2段組」「直音」に属するものとして扱うこととした。

- (4) 『海篇大全』の底本を「正徳以降」とするのは以下の理由による。『海篇大全』には「懇、音空、涵虚子作」「懇、與滅同、臞仙作」など、「涵虚子」「臞仙」（また「丹邱真人」）といった注記を持つ字が収録される。明・朱権の号がこれらと一致するという理由から、とりあえず今これらを「朱権字」と呼ぶことにするが、これら「朱権字」は成化本『五音集韻』『五音篇海』には見えない。現時点までに万暦本『五音篇海』『五音集韻』（内閣文庫蔵）及び正徳本『五音集韻』（早稲田大学図書館蔵）において「朱権字」が見出されたが、肝心の正徳本『五音篇海』における「朱権字」の有無は未確認である。ただ、正徳・万暦本の『五音集韻』『五音篇海』は常に韻書・字書の組として合刊される関係にあり、内容的関連も濃厚である可能性が高いことを考慮すると、万暦本の『五音集韻』『五音篇海』に見え、正徳本『五音集韻』に見えたのであれば、正徳本『五音篇海』における「朱権字」の存在も十分に予想される。このような理由から、本稿においては、『海篇大全』が正徳本を底本としている可能性もなお存しているという意味で、「正徳以降」と表記するものである。
- (5) 『詳校篇海』や、その内容を受継ぐ『訂正篇海』『篇海類編』も反切と直音とが共存する海篇類である。しかしこれらの反切は『五音篇海』のものとはほとんど一致しない。全て調査してみたわけではないが、或は『広韻』その他の韻書を用いたのではないかと推測される。ちなみにこの書には「羣濁」「定濁」等、濁声類についての注記が見られ、性格的にも他の海篇類とは異質であるように感じられる。
- (6) 船津氏が『海篇大全』のような反切を大量に収録するタイプを音韻史研究資料としてどのように考えていたかについては、言及が無いため不明である。船津論文所掲の目録に『海篇大全』は収録されないが、本文中には『海篇大全』をその分類方式に関連して取り上げる箇所があるので、『海篇大全』を海篇類として認識していないわけではないようである。
- (7) 『經史海篇直音』という書名の字書には、五卷本と十卷本の2種類があるが、内閣文庫蔵の五卷本と尊経閣文庫蔵の十卷本を比較した限りでは、行格に違いはあるものの、内容的にはほとんど同じ書であると見て差し支えないようである。

〈付：『文化』掲載論文に対する補記〉

筆者は先頃、「韓道昭『五音篇海』とその依拠した韻書」（『文化』、第63巻第1・2号、1999年9月）と題する論文を発表した。その中で筆者は、『五音篇海』序に見える「王公」の「篇海」という書について、金・邢準の『新修累音引證群籍玉篇』がその編纂にあたって元にしたとされる、「王太」の「増廣類玉篇海」という書と何らかの関連があるのではな

いかと推測した。最近、清・潘祖蔭の『滂喜齋藏書記』の巻一に「金刻新修累音引證羣籍玉篇」の項を見出し、この問題について新たな知見を得たので、この場を借りて補足しておきたい。この項には『新修累音引證群籍玉篇』序を踏まえたらしき解題があり、「王太」の「増廣類玉篇海」を構成した要素として、「陰祐餘文」「古龍龕」「龕玉字海」「會玉川篇」「奚韻」「類篇」といった名が挙げられている。さらには、『新修累音引證群籍玉篇』に採用されているという、収録字の来源を示すマークの全種類が記され、確認の結果、その内の「陰祐餘文」「古龍龕」「會玉川篇」「奚韻」「類篇」に関しては、『五音篇海』に見えるマークと全く同種のものであった。これほどまでに構成要素名及びマークが一致するからには、『新修累音引證群籍玉篇』と『五音篇海』とは、共に同じ資料を祖本としている可能性が高い。そしてもし二書の祖本が同じ資料であったとするならば、『五音篇海』序に見える「王公」と、『新修累音引證群籍玉篇』序に見える「王太」も同一人物であると考えて良いということになろう。つまり、韓道昭『五音篇海』の直接の祖本である韓孝彦の「五音篇」は、王太の「増廣類玉篇海」の内容を大幅に受け継ぎ、さらに三十六字母の順に部首配列を変更して成った字書であったということが言えるのである。また従来は、韓孝彦「五音篇」は『龍龕手鑑』などを新たに取こんで部首が579種となっていたと推定されていたが、上に見るように「増廣類玉篇海」にはすでに『龍龕手鑑』らしき字書の内容が含まれていたようであるから、韓孝彦の書を待たずとも「増廣類玉篇海」の時点ですでに579部となっていた可能性も考えられる。ただ、『五音篇海』韓道昇序には「王公」の「篇海」は金の「甲辰歳(大定二十四年・1184)」に成書したとあるのに対し、潘祖蔭の述べるところに拠れば「王太」の「増廣類玉篇海」は「甲甲(後者マ：申の誤りであれば金の大定四年・1164)」歳の序を持つとされている点が気になる。また、筆者は上記論文において、『五音篇海』における「餘文」を、その性格を根拠として、書名ではないと判断した。しかし先にも示したように、潘祖蔭に拠れば『新修累音引證群籍玉篇』には「陰祐餘文」という名が見えるらしい。この名称について、「陰祐」という部分が具体的に何を表すものであるのか現時点で明確でなく、「餘文」が書名であると積極的に判断する材料としては、なお不十分なのではないかと思われ、書名であるか否かという問題については、現時点では判断を保留することとしたい。いずれにしても、「餘文」の内容が韓道昭『五音集韻』と関連性を持つことに変わり無く、「増廣類玉篇海」が刊行される以前に、韓道昭『五音集韻』の祖本となる韻書がすでに存在していたであろうことは、ほぼ疑いないと考える。

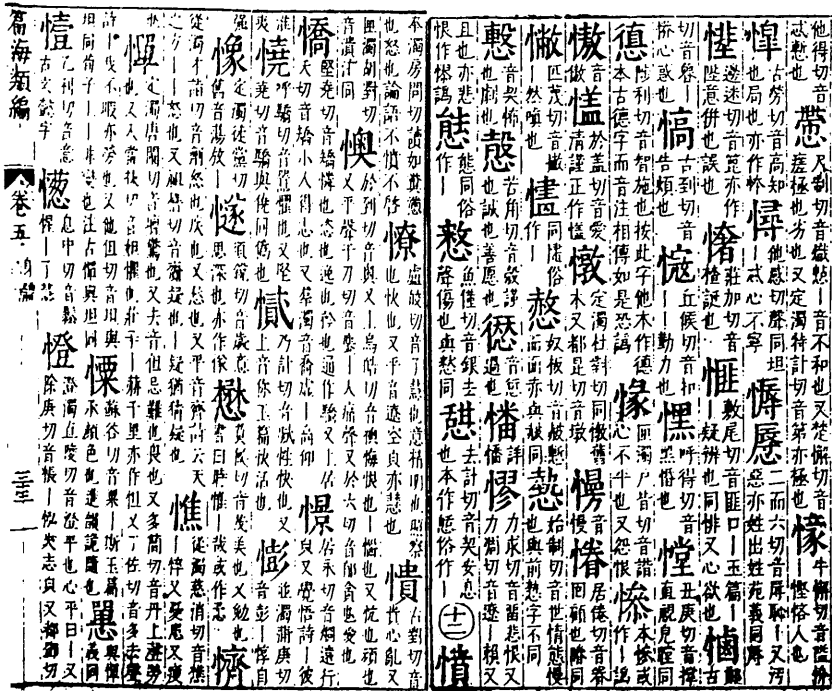


图 1. 『篇海類編』（『存目叢書』）所收北京大学圖書館藏本、1 段組／反切與直音／門類分部）

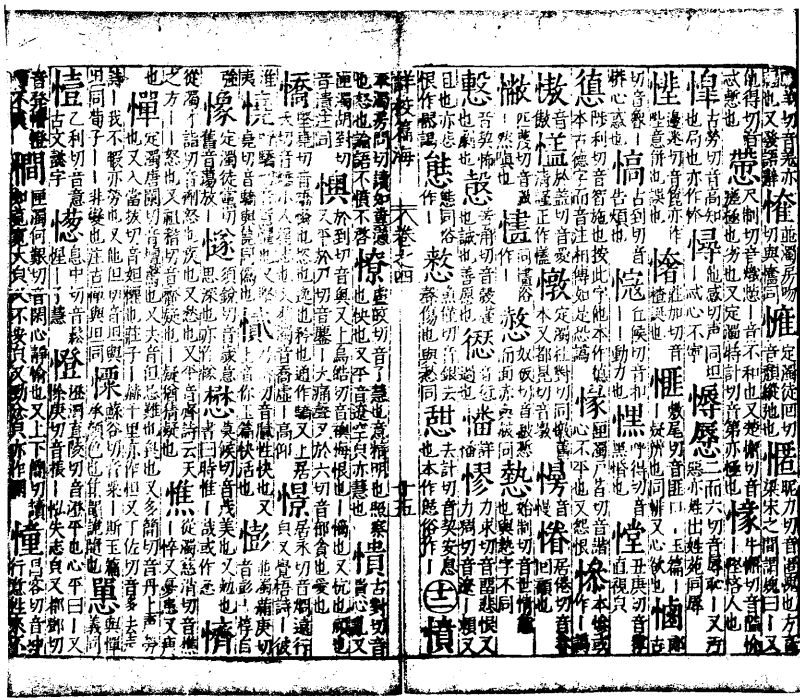


图 2. 內閣文庫藏『詳校篇海』（1 段組／反切與直音／字母分部）

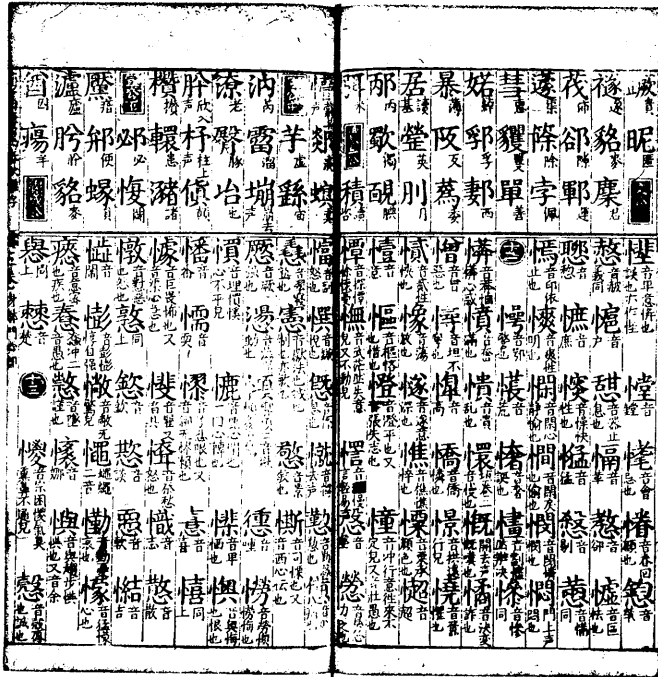


图 3. 内閣文庫藏『海篇隸書』(2段組：上段「春秋難字」／直音／門類分部)

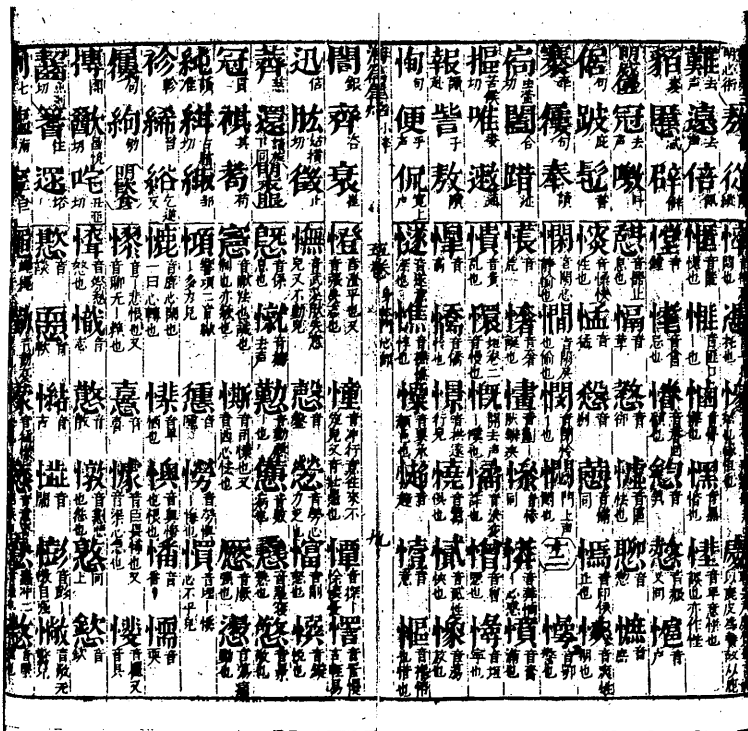


图 4. 国会図書館藏『海篇犀炤』(2段組：上段「小學難字」／直音／門類分部)

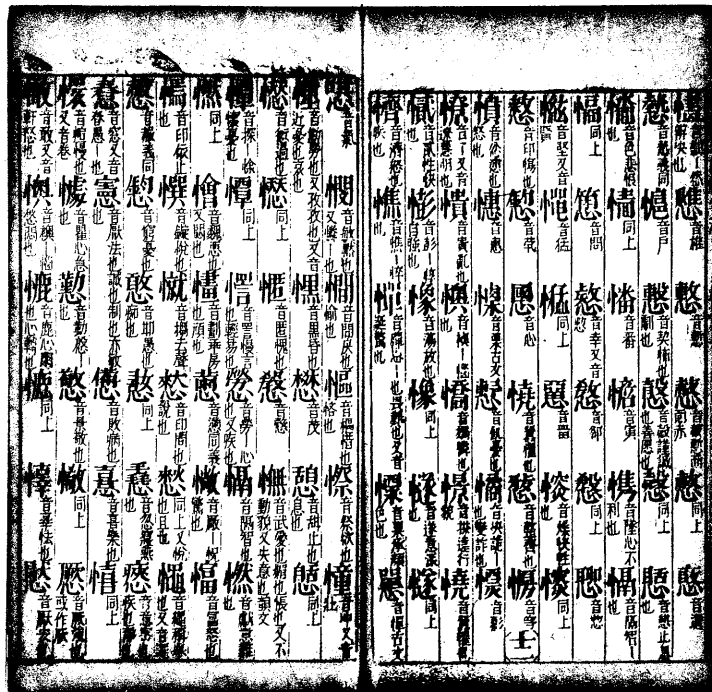


図 5. 内閣文庫蔵『五侯鯖字海』(1 段組/直音/字母分部)

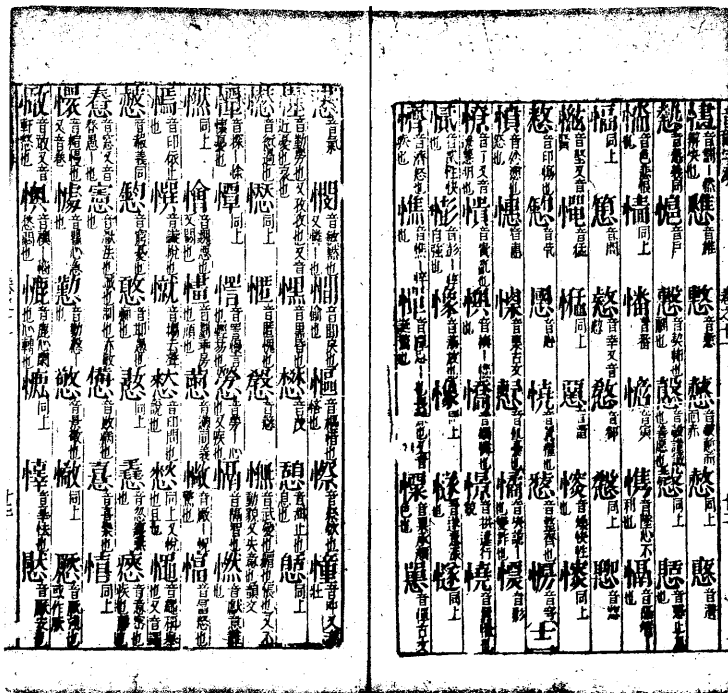


図 6. 内閣文庫蔵『音韻字海』(1 段組/直音/字母分部)

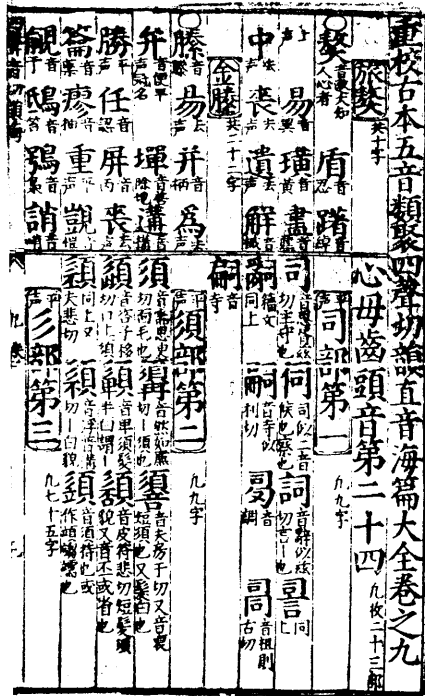
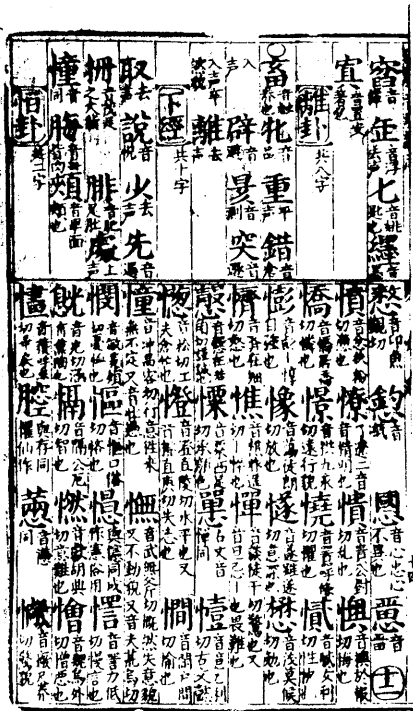


図7. 蓬左文庫藏『海篇大全』(2段組：上段右「書經難字」左「周易難字」／反切と直音／字母分部)

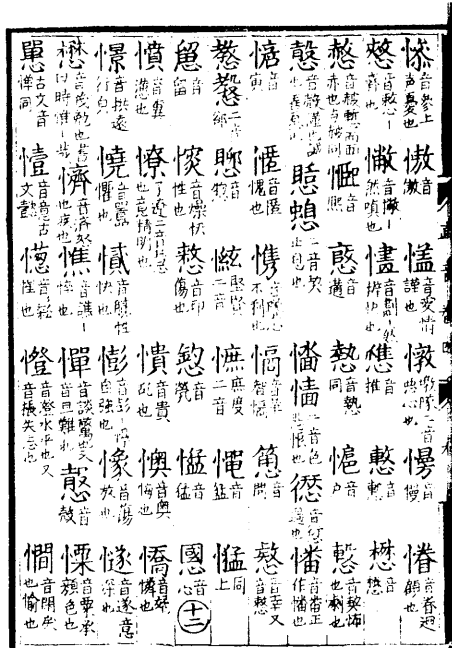


図8. 内閣文庫藏『海篇大音』(1段組／直音／字母分部)